第4号　地域連携プロジェクト（岡垣町・九州共立大学）
地域活性化
岡垣歴史新聞
制作・編集・発行
岡垣町・九州共立大学　地域連携
『岡垣歴史新聞』
プロジェクト編集委員会
（九州共立大学内）
代表　山田　明
〒807-8585
北九州市八幡西区自由ケ丘1－8
093－693－3403（山田明研究室）

巻頭言　戦国時代の岡垣、見参！

九州共立大学　教授　山田　明

二〇二〇年大河ドラマ（第59作）は、明智光秀を主役とした「麒麟（きりん）がくる」に決定しました。人気の高い戦国時代がテーマとなりましたが、この時代の岡垣はどのような歴史の中にあったのでしょうか。

岡垣を領有していた麻生氏、その地を狙っていた宗像氏、現在の福津市に勢力をもち宗像氏と対立の関係にあった河津氏がいました。そこに教科書でも登場する有力な戦国大名の大内氏、毛利氏、大友氏などが介入してくるという構図があったのです。岡垣町の吉木にある岡城はまさに麻生氏と宗像氏の対決の舞台でした。現在、岡城周辺は整備されて住民の方の憩いの場所となっています。過去に戦いが行われたとは思えない静かな落ち着ける場所です。歴史とは過去の遺産であるとともに、現在に活かすべき財産でもあります。ぜひ、地域の魅力として地域活性化やまちづくりに活用していただくことを期待します。戦国時代の岡垣に関する歴史的な足跡は、岡城だけでなく龍昌寺、高倉神社などにもみられますし、宗像市との境界線にある四塚連山にある複数の山城などもそうでしょう。岡垣は戦国時代の遺跡の宝庫でもあります。

今回の地域活性化新聞では、来年の大河ドラマのテーマでもある戦国時代に焦点をあて、九州共立大学スポーツ学部の学生が、岡垣町史や他の文献資料、地元の方からの聞き取り、フィールド調査などを通して丹念にまとめました。小中学生においては、郷土学習の際に参考にしていただき、住民の方には郷土の歴史の再発見に活用していただければ幸いです。そのうえで、大河ドラマを見ていただければ、より一層、岡垣の歴史が身近に感じられるでしょう。岡垣歴史新聞第４号を心ゆくまでお楽しみ下さい。

岡垣歴史新聞の第４号発刊に寄せて

岡垣町長　宮内　實生

平成27年８月に九州共立大学と当町で締結した包括的地域連携協定に基づく連携事業も今年度で４年目を迎えました。その間、大学の教員や学生の知識、経験や行動力を生かし、スポーツの振興、福祉の向上、生涯学習の取り組みなど、様々な取り組みを行っています。

中でも、ともに地域の魅力の再発見を目的とした「岡垣学」とこの「岡垣歴史新聞」については、当町の歴史文化研究会などの助言を受けながら、学生のフィールドワークなども交えながら編集され、その成果をボランティア交流会で発表する取り組みがなされるなど、地域の魅力の再発見によるボランティアの活動の発展にも寄与するものであると考えています。

さて、岡垣歴史新聞の第４号は、「岡垣の戦国時代」の特集が組まれ、岡垣町内はもとより北九州市や遠賀郡内の城址などについても触れられています。この中でも、町指定史跡である岡城址では、地元の吉木区の皆さんによる草刈りや地元の有志で組織する岡城址と里山を守る会による進入竹の除去や植樹活動など、多くの住民の方々の手によって、良好な状態が守られています。また、標高も比較的低いため散歩コースの１つとしてもお勧めできるスポットですので、この岡垣歴史新聞をご覧になった機会にぜひお立ち寄りください。

岡垣の山城、再発見！
～戦国ブームとまちづくり～

山城とは、山の立地を利用して築かれた城のことで、自然の山を削り、掘り、盛り固めて、堀や土塁、曲輪（くるわ）（区画された平坦地）などを造成した城のことです。そこに建てられた建築物は木造であったこともあり、遺構が残っていません。石垣が一部残っているケースもあります。山城は、天下統一に向かった戦国時代にその需要がピークを迎えました。その理由は、戦が日常的に起こっていたからです。

現在は空前の城ブームとも言われ、山城人気も高まっています。第４号の岡垣歴史新聞で特集する「岡垣の戦国時代」にもいくつもの山城が造られており、その完全な遺構はないものの、当時をしのぶ遺構や遺物は残っています。何よりも山城があったところが、岡垣の町から遠望であれ、望めるロケーションにあることが素晴らしいことです。

岡垣の町民の皆様には、今号をもとに岡垣の歴史を再認識され、山城を訪ねたり、遠望を楽しんだり、故郷の戦国時代に思いを巡らしていただきたいと思います。そのことで豊かな歴史をもつ地域の再発見となり、まちづくりの一つのきっかけとなるのではないでしょうか。NHK大河ドラマに明智光秀が登場します。ドラマの放映で戦国ブームが来ることを期待しつつ、岡垣町にも多くの歴史ファンが訪れてくることを期待したいと思います。

（山田　明）

南京の城壁

陳（チン）　貝（カイ）　麗（レイ）（留学生・中国）

九共大 山田研究室にて 2019,7,9

日本人の皆さんにとって中国と聞けば、おそらく万里の長城をイメージするのではないでしょうか。今回の歴史新聞のコラムでは、中国の城について書きたいと思います。私が紹介したいのは「長城（「城墻」）と「城壁」についてです。中国では「長城」と「城壁」は違うものです。どこが違うと思いますか。見た目は似ていますが、「長城」は、国境を守るために軍事的な安全を確保するものです。「城壁」は、首都を守るため造られたもので、君主の威厳のシンボルでもあります。

私の出身地は中国の南京です。南京には、世界一番長く、規模が最も大きく、現在でもよい状態で保存されている「城壁」があります。明朝（一三六八～一六四四）時代の最初は、南京が中国の首都でした。明朝の最初の君主である（洪武）帝は、新しい時代の始まりにあたり新しい首都をつくりました。大臣らの建議を採択して南京につくることにしたのです。その原因は南京の地形が「虎踞龍蟠」（虎が蹲っているようで、龍が飛んでいるような要害なところ）だからでした。首都になれば敵から攻撃されにくい地形です。「城壁」の中心部は、複数の城門で隔てられ、そこに至るまでにはたくさんの階段もあります。

私は、中国でお母さんと一緒に歩いたことがあります。建築されて数百年の時が経っているのにとても固くて頑丈です。私は子供の頃から、「城壁」を身近に見てきたので意識せずにいました。今回このコラムを書くにあたって、「城壁」の歴史を振り返ってみましたが、歴史的に本当にすごいものであること、建造物としても立派な建物だと思いました。南京の町中から「城壁」が見られます。この「城壁」は、欠くことができない南京の町の一部分になっています。私の郷土、子供のころから住んでいた南京の町が、本当にいいところと再認識しました。

南京市内の城壁

『岡垣の戦国時代』
～岡垣と麻生氏～

”麻生氏の居城“を視点に岡垣の戦国時代を読み解く！

1．はじめに

今回の岡垣歴史新聞は、『岡垣の戦国時代』というテーマで臨みたいと思う。というのも、二〇二〇年度のＮＨＫ大河ドラマの主人公が明智光秀であり、世の中に少なからず戦国ブームが起きると予測するからである。ということで、岡垣の戦国時代に目を向けてみたい。岡垣は、宗像の宗像氏、御牧郡の麻生氏の勢力がぶつかり合う場所であった。筑前国においては、当時の福岡県北部には強大な戦国大名の存在はなかった。そのため、宗像・麻生の両氏は、大内氏・毛利氏・大友氏といった周辺地域の強大な戦国大名に従属、離反を繰り返していた。またそれに加え、両氏ともに村や田畑の所有権拡大をねらって小競り合いを繰り返していた。特に麻生氏は、支配する御牧郡を毛利元就と大友義鎮（大友宗麟）の勢力に囲まれており、しかも所領の拡大が望めなかった。そこでも、宗像への進出の足場として岡垣が重要な存在となったのである。そこで、現在の岡垣町吉木の地に国城が築かれ、城主として麻生隆守が入城することになった。この麻生隆守の背後には、古賀城の麻生鎮里、山鹿城の麻生元重、花尾城の麻生家氏などがいた。これら麻生一族と蔦ケ岳城（城山）の宗像氏貞が攻防の舞台としたのが岡垣であり、岡垣を越えるか、越えないか、それが岡垣の戦国時代なのである。この攻防の一方の当事者である麻生氏について、その居城とともに紙面を使って紹介してみたい。

2．麻生隆守（あそうたかもり）と岡城

岡垣町の吉木地区に隆守院（りゅうしゅういん）という寺がある。この寺は麻生隆守（以下、隆守）の菩提寺であり墓がある。だからこそ、「隆守」の名が寺の名となっている。宗像進出の前線基地として築かれた岡城、築城者の隆守が城主となり、吉木の集落一帯に城下町らしきものを形成したようだ。隆守は、岡城のほかにも三吉城等の支城を築き、守りを固めたようだ。これを嫌った宗像氏貞（以下、氏貞）は、大友宗麟の支援を受けて岡城を攻撃した。氏貞は、瓜生貞延に岡城攻めを命じた。その結果、隆守は宗像の軍勢に敗れ、岡城は落城した。隆守は、妻子と共に城から逃れ、海蔵寺に入った後、妻子を殺して自らも自刃した。こうして、氏貞は目の上のこぶのような存在を取り除き、麻生氏の宗像進出に歯止めをかけた。さて岡城のことについて記してみたい。城は、吉木集落背後の丘陵に築かれた小規模なものである。近くを流れる川を天然の外堀とし、本丸・二の丸・三の丸の三つの曲輪で構成されている。虎口（こぐち）（出入り口のこと）には、堅固な土塁が築かれ、小さいながらもよくまとまった城と言える。今日でも城跡の遺構は、極めて良好な状態で残っている。

岡城跡・主郭部入口の石碑
（遠賀郡岡垣町）

隆守院・麻生隆守の墓
（遠賀郡岡垣町）

3．麻生鎮里（あそうしげさと）と古賀城

麻生鎮里（以下、鎮里）は、竹尾城（現、八幡西区）を本拠としていたが、岡城陥落に伴い、岡垣に近い地点である豊前坊（現、水巻町）に古賀城を築き本拠とした。併せて近郊に浅川城（現、八幡西区）を築き支城とした。これは、宗像氏の御牧郡進出を抑制するのが目的だったと考えられる。しかし、一方で内紛状態にあった山鹿城の麻生元重と花尾城の麻生家氏の間に割り込み、両者を分断する目的もあったと言われる。ともあれ、宗像氏貞が岡垣方面から進出してくるのを防ぐことも確かな目的だったと思われる。その後、鎮里は豊臣秀吉の九州出兵に抵抗したため秀吉軍の攻撃を受け、竹尾城・古賀城・浅川城の三城の領有権を失い行方不明となった。ところで、古賀城は、水巻町の豊前坊という低山に築かれた城である。山のふもとに古賀の集落があり、かつてこの辺に家臣団の武家屋敷があったと推定される。今日、山の中腹に城の石垣が残るほか、山頂からは遠賀川流域の広大な景色が展望できる。

古賀城跡・本丸跡の石垣
（遠賀郡水巻町）

古賀城跡・本丸跡の石碑
（遠賀郡水巻町）

4．麻生元重（あそうもとしげ）と山鹿城

遠賀川の河口近く、芦屋町の山鹿地区に山鹿城という城があった。河口近くの丘陵に築かれた城で、この城もまた鎌倉時代から麻生氏が城主となっていた。この城から宗像郡への進出を窺がうと共に芦屋湊を利用しての海上交易も活発で、重要な軍事拠点となっていた。しかし、麻生元重が城主の時、豊臣秀吉の九州出兵があり、その後の秀吉による国割で元重は城を追われることになり姿を消している。ところで、麻生氏は大内氏や大友氏といった強大な戦国大名に従属と離反を繰り返していたため、しばしば戦いに巻き込まれている。そうした戦いで亡くなった麻生一族の墓が芦屋町の金台寺（こんだいじ）にある。さて山鹿城は、平安時代に平家の山鹿秀遠が築いたといわれ、その後に麻生氏の城になった。現在の城跡は城山公園となり、花見の名所として町民の憩いの場となっている。遺構と言えるほどのものはないが、城址碑と石垣の名残が存在するのみである。

金台寺・麻生一族の墓
（遠賀郡芦屋町）

山鹿城跡・本丸跡の石碑
（遠賀郡芦屋町）

5．麻生（あそう）家氏（いえうじ）と花尾城

麻生氏の本流、本家筋にあたるのが八幡西区の花尾山に城を構えた一派であろう。当初は、帆柱山に築いた帆柱城を本拠としていたが、やがて花尾城を本拠とした。周防山口の大内氏と豊後府内の大友氏の両氏に従属と離反を繰り返したり麻生一族同士の内紛も重ねながら、宗像への侵攻も野心として持っていた。そのような中、大内氏の大軍に花尾城を囲まれ、大友氏の軍勢にも支城を落とされている。麻生家氏が当主の時、豊臣秀吉の九州出兵が実施され、家氏は秀吉に従うことを決めた。しかし秀吉は、家氏を筑後星野方面へ移封した。その上、新しく筑前の国主となった小早川隆景の与力を命じた。こうして花尾城は麻生氏の手から離れ、やがて廃城となった。ちなみに家氏は、小早川隆景・秀秋に従え、黒田如水・長政にも従えた。家氏は如水の妹の妙円を妻に迎えるも結婚生活はうまくいかず離別し、黒田家との縁が切れることになる。次に花尾城のことについて記したい。八幡西区の花尾山に築かれたこの城は、北九州一円の中世の山城では、一、二を誇る規模を持つ。築城者は鎌倉時代に源頼朝の命令で西国に下向した宇都宮氏で、下向二代目の宇都宮資時である。資時は筑前麻生荘（現、戸畑区）の地頭となって麻生氏を名乗って麻生氏の祖となった。城の構造は、山頂から階段状に本丸・二の丸・三の丸・四の丸・出丸というように連郭式城郭となっている。本丸周辺部に堅固な石垣が構築され、さらに石垣で固められた大井戸も存在している。至る所に土塁や竪堀があり、全山が要塞化されている。今日でも数多くの貴重な遺構がのこっている。なお通常の城主居館は、現在、赤穂義士や真田増丸の墓所となっている場所にあったとされる。

花尾城跡・主郭部入口の石碑
（八幡西区元城町）

花尾城跡・本丸跡の石垣
（八幡西区元城町）

6．麻生（あそう）家見（いえはる）と花房城

御牧郡全域を支配していた麻生氏は、領内各所に城を築き支配権を強化した。その上で、岡垣を越えて宗像への進出を狙っていた。一方、宗像氏は当初、大内氏に従属していたが、大内が滅亡するや大友氏に従属先を変更した。宗像氏貞は、妹のお色姫を大友宗麟の重臣である立花道雪に嫁がせ、大内氏寄りであった西郷党の首領の河津隆家を殺害している。こうした経緯もあり、大友宗麟は宗像氏貞を支援することになり、氏貞と反目する麻生氏を攻撃した。そこで岡垣の岡城が攻撃され、麻生隆守の自刃となる。さらに、花房城（若松区）の麻生家見もまた大友氏側の軍勢に城を攻められた。花房城は、現在の若松区畠田に所在する岩尾山に築かれた城で、麻生氏の軍事拠点の一つだった。城は大友方の猛攻によって落城、城主の麻生家見は自刃して果てた。この時、家見の姫が数名の家臣とともに城を脱出したが、狩屋という集落で追っ手に捕まり、姫は殺され家臣たちも自刃したという。現在、その地に姫地蔵が祭祀されている。ところで、花房城であるが、山頂を主郭とし土塁や竪堀で城の守りを固めている。また城主居館が麓に築かれていた。現在の城跡にはＮＴＴの通信ケーブルの鉄塔が建てられているが、主郭部周囲には土塁が残っている。ちなみに城主居館は、現在の若松商業高等学校に近接していたと考えられている。残念ながら、その遺構は何もない。

花房城・城跡の説明板
（若松区畠田）

7．おわりに

戦国時代の岡垣は、麻生・宗像両氏の攻防の鍵を握る重要地点であった。当初は、吉木の岡城を居城とする麻生氏が岡垣を支配したが、宗像氏が岡城を落とすと、岡垣の地は宗像氏の支配が強まっていった。現在、岡垣の手野集落を見下ろす山に手野城が築城されていたが、この城は岡垣を防衛線とする宗像氏の前線基地であった。また岡垣を麻生氏から奪還した宗像氏はその後攻勢に転じ、岡垣から御牧郡の麻生氏領に侵攻した。そして、花房城（現、若松区）や天賀城（現、戸畑区）といった麻生氏の城を攻略している。こうして岡垣を死守した宗像氏であったが、豊臣秀吉の九州出兵時に当主であった宗像氏貞が急死し、宗像の地を没収され改易処分を受けた。一方の麻生氏も御牧郡から筑後へ転封され、岡垣を巡って攻防を繰り返した宗像・麻生両氏は共に滅亡へと衰退の道をたどることになったのである。

参考文献
①『図説　嘉穂・鞍手・遠賀の歴史』（深町純亮監修、郷土出版社）
②『福岡県の城』（廣崎篤夫、海鳥社）
③『福岡県の城郭（戦国城郭を行く）』（福岡県の城郭刊行会編）
④『筑前戦国氏　増補改訂版』（吉永正春、海鳥社）
⑤『戦国人名事典』（阿部猛・西村圭子、新人物往来社）
⑥『戦国大名家事典』（森岡浩、東京堂出版）
⑦『北九州市史跡ガイドブック』（北九州市教育委員会、小川印刷）

三浦明彦（遠賀町在住、郷土史家）

岡垣町史にみる中世・戦国時代！

※本文は、「岡垣町史」をもとに整理、編集したものです。

Ⅰ 麻生氏の勢力拡大

洞海湾一帯から遠賀川流域にかけて勢力をもった麻生氏の一族、家延が芦屋に館を構えていた。麻生氏系図の一つにこの家延が遠賀郡吉木に築城したことを載せる。また、家延の兄弘繁が延徳三年（一四九一年）に高倉の龍昌寺を開基し、長門大寧寺の足翁永満を招いて開山としたことがみえる（『龍昌寺縁起』）。この時期、麻生氏の勢力が岡垣町域に深く浸透してきたことを物語っている。家延の子興春も吉木の岡城にあったが、のち花尾城に移っている。その後、興春の子家重、その子興益と、家延の家系が麻生氏の本流をうけついだことを意味する。岡城には興益の弟、隆守が在城し、その他、御牧郡内の十ヶ城のうち九ヶ城までが麻生氏の端城であったといわれている（『宗像記考証』）。この時期の麻生氏の関係の資料は必ずしも多くない。永生十六年（一五一九年）大内義興は小笠原元長より伝授した「騎射秘抄」を麻生兵部大輔興春の懇望により書写し与えている（川添昭二氏「九州文芸の展開」（『中世文芸の地方氏』）のは数少ない資料の一つといえる。

吉木の岡城

麻生家延によって築城された岡城は、別名腰山城ともいい吉木の矢口にある標高三十メートルの小丘陵に立地している。本丸跡は東西三十五メートル南北十五メートルの平坦地、東に一段さがった東西十五メートル、南北八メートルの平地が二の丸にあたり、腰郭・土塁空堀などのあとが認められる（『日本城郭体系』）。汐入川を天然の外堀とし、矢口・正矢口・古小路あたりを郭内とした城造りとみられ、城跡の周囲は急斜面で守られ、汐入川の流道が現在より南へ下っていたと考えればきわめて堅固な城であったと思われる。岡城主麻生隆守の最期について、天文十五年（一五八七年）大友宗麟が隆守の臣、瓜生貞延に岡城を攻めさせ、隆守は内浦の海蔵寺まで逃れて自害をしたといわれている（『吉木旧記』『宗像軍記』）。海蔵寺本堂の裏手には隆守の墓と称するものも残っている。しかし天文十五年当時、大友義鎮は宗麟と名乗ってはいなかったし、名古屋大学の真継文書により天文十五年、岡城落城はなかったとも考えられる。

大内氏の滅亡

天文二十年（一五五一年）、筑前守護でもあった大内義隆はその臣陶晴賢に攻められ、長門大寧寺で自害した。晴賢は、豊後大友義鎮の弟、義長を迎え大内氏の名跡を継がせている。義長は初名を晴英といい、入部するとただちに大内義隆の旧領支配に乗り出している（承天寺文書ほか、大内晴英安堵状等）。しかし義隆の時代に比べてその支配力の後退はいかんともしがたく、特に筑前での晴英＝義長の出した文書はあまり多く残っていない。この期に麻生氏ら在地勢力が自立化への方向を打ち出しはじめるのは当然のことで、木屋瀬にある永源寺には麻生氏の家臣と思われる益守・実忠連署の天文二十年十月二十八日付の寺領安堵状が残っていたという（太宰管内志鞍手郡）。弘治元年（一五五五）、毛利元就は陶晴賢を厳島に破り、同三年には義長も討って周防・長門をその手に握った。かねてより九州征覇の望みをいだく義長の実兄、大友義鎮はこの期をのがさず豊前・筑前への侵入を開始した。

【人名紹介】

●麻生家延（年未詳）
筑前遠賀郡の国人・麻生氏の惣領・麻生家春の子。兵部大輔。

●大内義興（一四七七～一五二九）
父は周防守護で大内氏の第十四代当主・大内政弘。弟に大内高弘がいる。正室は長門守護代・内藤弘矩の娘。子に義隆（第十六代当主）、娘（大友義鑑の正室）。室町幕府の管領代となって将軍の後見人となり、周防・長門・石見・安芸・筑前・豊前・山城の七ヶ国の守護職を兼ねた。

●小笠原元長（一四三三～一五〇三）
備前国邑久郡鹿忍（岡山県牛窓町）・藤井庄（岡山県岡山市）を所領とする。室町幕府奉公衆京都小笠原氏の一門。

●真継久直（年未詳）※「真継文書」
戦国期に入り、戦国大名は武器・鉄砲等の生産を把握すべく鋳物師をその支配下に置いたので、供御人組織は解体、紀氏も借銭のため没落寸前となったが、柳原家の家臣真継久直は紀氏の家を乗っ取り、一五四三年（天文十二）後奈良天皇綸旨を得て鋳物師組織再興にのり出す。今川氏を手始めに、久直は四十九年以後、大内氏の領国を遍歴、鋳物師公事役徴収を保証された。

●大内義隆（一五〇七～一五五一）
戦国時代の武将、守護大名、戦国大名。

●陶晴賢（一五二一～一五五五）
周防大内氏庶流の陶氏の生まれ。大内家の重臣（周防国守護代）として大内義隆の下で重きを為した。

●毛利元就（一四九七～一五七一）
室町時代後期から戦国時代にかけての安芸の国人領主で、後の戦国大名。本姓は大江氏で、毛利氏の家系は大江広元の四男毛利季光を祖とする血筋。寒河江氏などは一門にあたる。家紋は一文字三星紋。

（今井　智紀）

Ⅱ 大友氏の筑前進出

永禄二年（一五五九）六月、豊前・筑前および筑後の守護職に正式に任命された大友義鎮は、すぐさま軍を北上させ豊前・筑前の領国化に着手した。同年八月二十六日大友義鎮は「門司・花尾・高春岳未落去之由候条、親賢被申談、残党不抜足之様可被打果事、頼存候」と田原親宏に書きおくり、十月一日には門司要害落去を注進してきた佐田隆居に感状を送った。有名な門司城合戦の話だが、花尾城もこの時、大友軍の攻撃の対象になっていたことは重要である。永禄三年から四年にかけて、大友氏の手に落ちていた諸地域で反乱が起こり、毛利氏もそれを支援している。四年末再び門司城周辺において毛利軍（小早川隆景を主力）と大友軍（田原親宏を主力）の激戦がおこなわれ、親宏らの総退却となって、門司から小倉にかけては毛利氏の支配するところとなった。岡垣町域については宗像氏貞の勢力が浸透してくる。

金台寺過去帳

芦屋にある時宗の寺院金台寺には中世の過去帳がつたえられている。その中に、永禄二年（一五五九）九月廿六日に、前麻生殿重阿弥陀仏が御ハラメサルとあって切腹したことが記されている。重阿弥には次郎殿の註記がある。永禄二年といえば大友氏により花尾城が攻められていた時にあたり、前麻生殿の切腹がそれに関わる事態の可能性は強い。さらに、真継文書に隆守が天文十九年において麻生次郎と称されていたことを考慮すれば、過去帳にみえる前麻生殿は他ならぬ隆守と考えていいのではないだろうか。過去帳には切腹の場所が記されてないため、隆守が花尾城にいたのか或いは岡城にいたのか不明であるが、大友氏の働きかけで瓜生貞延が隆守を攻めたと伝える。永禄二年九月末、遠賀郡一帯に勢力を築いていた麻生氏は、その一部を残してほぼ族滅に至った。

【人名紹介】

●田原親宏（生年不明～一五七九）
初名は親実（ちかざね）。田原親述の子で、同母兄・田原親董（ちかただ）の養子になった。大友義鑑の時代から大友家に仕えており、天文三年（一五三四年）の勢場ヶ原の戦いで大内義隆配下の陶興房と戦った。

●佐田隆居
一五五六年、佐田隆居、佐田鎮綱父子は大友義鎮に降伏した。その後、大友義鎮勢に属して宇佐郡衆を率いて北九州各地を転戦した。一五七八年、「日向耳川の戦い」で大友義鎮勢が大敗を喫すると、豊前国人衆の多くが大友義鎮勢から離反したが、佐田隆居は大友義鎮勢に従い続けた。一五八三年、安心院公正が大友義鎮から離反して龍王城に籠城すると、佐田隆居はこれを攻撃して、本領安堵の条件を出して開城させた。安心院千代松丸は落延びる途中に佐田鎮綱勢に捕えられ自刃した。

●前麻生殿（年不詳）
天文十五年（一五四六年）、主君大友義鎮から遠賀郡岡城主・麻生隆守（麻生家信の嫡男）討伐の命を受け、岡城を攻略した。以後、城主となり遠賀一帯を統治する。岡城の近くを流れる血垂川は、貞延と隆守の軍勢が戦った場所であり、川の流れが血で染まったことに由縁している。

（大賀　康平）

Ⅲ 宗像氏の遠賀支配

宗像氏の進出

永禄二年（一五五九）九月十五日、大友氏の家臣、怒留湯鎮氏は数万の軍兵を率いて宗像神社を攻め込んだ。大宮司宗像氏貞は家臣らにまもられ大島に退却した（宗像第一宮御宝殿置札）翌三年三月、鎮氏の籠る許斐岳に夜討をかけこれを奪還した。氏貞（『新撰宗像記考証』）は、さらに歩みを進め、遠賀庄の芦屋津・広渡を西限に、鞍手郡の若宮庄にまで手をのばしその支配下に置いた（宗像第一宮御宝殿置札）。なお、「永禄三」年二月十六日付の益定（爪生主馬充）による遠賀庄山田郷惣田数注文（宗像神社文書）には、寺社領拾六町九段半、益定給三町六段六十歩、御公田五拾町六段大とみえ、これが宗像氏家臣の吉田駿河入道・同次郎左衛門尉に提出されていることをみると、宗像氏の遠賀進出を手引きしたのは麻生氏旧臣の瓜生氏らであったと考えられる。永禄四年閏三月、氏貞は内浦郷参拾町を孔大寺権現に寄進している（宗像神社文書）。永禄十年七月には、新しく麻生本流を継いだ隆実をたすけ、大友方についた麻生鎮里を上津役の要害に攻めている。隆実は室町期の麻生義助よりわかれた一族の一つから入った者で、遠賀川より東の地域を確保するのがやっとで、それも一族内部の対立により宗像氏の支援を仰いでいたのである。

立花城攻め

福岡市と新宮町の境にある立花山には古くから大友氏の出城立花城が築かれていた。南北朝期には大友氏の一族立花氏がここを預かり西大友氏と称され、博多津へのにらみをきかしていた。永禄十一年（一五六八）、立花城督、立花艦載は毛利方に内通し、立花山西城にいた怒留湯主計充を攻めた（怒留湯文書）。大友宗麟はすぐさま鎮圧軍を差し向け、毛利氏の支援をうけた立花城を攻撃し、これを落とした。立花城奪還をはかる毛利氏は、吉川元春・小早川隆景を将として大軍を以って立花城を包囲した。その後、援基地として小倉津にも城を築いている。（有川「中世末における小倉城に関する若干の資料」（『記録』）二十三）。名島内海に兵船を浮かべた（宗像第一宮御宝殿置札）というから水軍力が大きな役割を果たしたものと思われる。宗像氏貞もこれに従い、八月には新宮湊で大友軍と戦っている。（『新撰宗像記考証』）。立花城が毛利方の手に落ちたのもつかの間、宗麟による尼子氏挙兵策や大内輝弘の山口侵入策などのため、毛利勢は急遽、大友氏と和睦を結び兵を九州より引き上げることとなった。氏貞も若宮・西郷の地を割譲して宗麟と和睦を結ぶに至った。

（川勝　陽祐）

Ⅳ 蔦ヶ獄城と岡垣

永禄三年、宗像・遠賀を回復した氏貞は、蔦ヶ岳に城を築き三年ののち完成した。今の城山がそれで、それまでの白山城、孔大寺山よりもはるかに堅固で交通の要衝にもあたっている（『宗像神社史』下巻）。何よりも宗像・遠賀御牧両郡ににらみのきく所で、宗像氏の遠賀進出を前提とした城構えであった。宗像神社境内地を見通すことのできる白山城から、蔦ヶ岳城への移動は宗像氏貞が宗像大宮司という立場から戦国大名宗像氏への脱皮を宣言したものでもあったといえよう。

戦国大名　宗像氏

宗像氏貞は、幼名を鍋寿丸といい、周防黒川で成長し、天文二十一年（一五五二年）、陶晴賢の後循で宗像大宮司家の家督を継いだ（『宗像神社史』下巻）。永禄二年（一五五九年）、大友氏の軍により居城白山城を逃れ大島に渡ったのち、翌年には許斐城を夜襲して遠賀・宗像を奪還した。蔦ヶ岳城を居城とした氏貞は、毛利・大友両氏の攻防の中で戦国大名としての成長を着々と遂げ、近隣に武威を張るに至った。宗像氏の家臣団を知る資料に宗像分限帳と呼ばれるものが数種ある。『宗像神社史』が指摘するようにいずれも全面的に信がおきがたいものであるが、元和三年三月以前には成立していたと思われ、中世末の家臣団の一斑をうかがうことはできる。その一つ『宗像大宮司天正十三年分限帳』（『宗像神社史』下巻）によれば、田嶋衆、河東郷衆、河西郷衆、上八村郷衆、田野郷衆、池田郷衆、奴山郷衆、在自郷衆、宮地郷衆、勝浦村衆、本木郷衆、内殿郷衆、村山田郷衆、東郷衆、久原村衆、大穂光岡衆、曲村衆、野坂衆、山口宮永衆、室木村衆、赤間衆、土穴須恵衆、山田平等寺衆、大嶋衆、若宮衆ほかとともに遠賀衆として吉田左近充、竹井孫三郎、畔口伊与守以下総数八十九名の人名が記されている。この多くは畔口、井野口、藤田などもともと麻生氏の家臣であった者たちで、なかには竹井氏のように、遠賀庄天野郷内賀藤左衛門給弐町五段半、谷口飛弾守給壷町、西彦四郎給弐町大、都合五町六段六拾歩地事、連ヶ遂馳走条、令加御者という永禄

三年の宗像氏貞よりの知行宛行状を伝えているものもある（竹井文書）。ただし、遠賀庄衆と呼ばれた彼らが氏貞旗下にあって衆としての統一的な軍事行動をおこなった形跡はみられず、単なる地域性の表現でしかなかったと思われる。この地域性の表現は、宗像氏の当地域支配にとっては別の重要な意味があった。宗像氏貞は、弘治三年に焼失した宗像社本殿の造営を天正四年に至って志し、天正六年に完成した。その間の事情を記した『宗像第一宮御宝殿置札』によるとその造営費用として遠賀庄内の各位に対して十ヶ年の御段米を課している。ところが、彼らは別に、高蔵宮に対しても二年にわたる段別三升の造営費用も捻出せねばならず、二重の調達になることをなげいている。戦国大名としての両国支配に関わる法体系など詳しいものは不明であるが、宗像氏貞が毛利・大友両氏の抗争のはざまにあって、秋月・龍造寺氏らと独自の交渉も保ちつつあったことは彼が着実に戦国大名の道を歩んでいたことを示している。岡垣町域はまさにその両国支配下に位置していたのである。しかるに宗像氏貞は天正十四年（一五八六年）三月風邪をこじらせ四二歳で世を去った。（川上　滝盛）

岡垣との視点でみる ～城山（蔦ヶ岳城）～

城山（蔦ヶ岳城）

城山（宗像の人は「じょうざん」または「じょうやま」と呼んでいる）の本来の名称は蔦ヶ岳（つたがたけ）城である。岡垣から国道三号線を下ると、すぐ城山峠に差しかかる。峠の右手はすぐ城山の南尾根である。城山と言い馴らされているのは、中世にこの地域を支配した宗像氏貞が、この山に蔦ヶ岳城を築いて居城としていたことからきている。山城に相応しく、山は急峻である。登山口は、福岡教育大学がある宗像市陵厳寺が南側の正面口であるが、岡垣町側からは上畑の敷島稲荷社から七合目を経て頂上に上るコースがある。この八合目辺りの鞍部に、樹齢四六〇年、樹高一四メートル・胸高直径七九メートルのイロハカエデがある。周囲には、他の広葉樹に混じって数十本のイロハカエデが見受けられる。この鞍部は岡垣町に属していて、かつて町でも「町域の貴重な樹木の属する調査」の対象にしている。言い伝えではこの樹は、宗像氏貞が生まれ育った山口を偲んで同地から運ばせて植えたものとされている。城山は県の風致保護林に指定されていて、山岳植物の生態でも知られている。岡垣町側からの登山ルートでは上畑から宗像市平等寺に抜け石峠から北面の稜線を登ることができる。

城山（蔦ヶ岳城）のことは、上畑の存在とは所縁が深い。城のことについては、廣崎篤夫著の『福岡古城探訪』が参考となる。城山と言い慣れている蔦ヶ岳城の正面は、赤間側にある。西鉄赤間バスセンターの横手に、「城山登山道入口」の標識がある。登り道は急だが整備された登山道なので一時間ほどで頂上に達する。頂上までの途中には、番所跡や曲輪跡などが確かめられる。山頂は広場で、五五メートル×二二メートルの広さがあり城の石塁も残っている。広場の中央には、大きな石灯籠と記念碑がある。蔦ヶ岳城の構築は古く、第六代宗像大宮司妙忠（父宗時から譲補任されたのは長元七年）の時代に築城されたがその後廃城となり荒廃した。南北朝時代の建徳元・応安三年に五四代大宮司氏俊が、一時この城を修築し入城したが間もなく廃した。さらに時を経て七九代大宮司となった宗像氏貞は、この城が要害の地であることから再築城を図った。氏貞は、城の規模を今までよりもはるかに広げ、城の南東の宇土に大手門、門司口にあたる石丸・鐘崎に至る街道筋に城腰城、草場城、赤城の番所出城が設けられ、それまでの居城であった白山城（宗像市山田）を出て蔦ヶ岳城に入った。氏貞の頃は戦国の世で、北部九州では少弐氏が滅び、毛利・大友の両氏対立の時代を迎えていた。宗像氏は毛利方で、氏貞は青年期まで山口で育っている。当時、大友氏は戸次道雪を城主とする立花城（粕屋郡新宮町）を筑前の拠点としていたので、宗像氏はこれに備えて許斐城（宗像市王丸）を前線基地として、大友勢と毛利勢の攻防の渦中にあった。氏貞の蔦ヶ岳城への移転は、こうした事情から生じたものである。氏貞が蔦ヶ岳城に入城した八年後の永禄十二年十月十六日、大友勢は毛利勢が中国に引き揚げた隙をねらって突如、宗像の地に攻めこんだ。このとき宗像勢は大友勢の激しい攻撃に敗走し、氏貞は蔦ヶ岳城に籠城し両軍は数日を対峙した。蔦ヶ岳城を攻めあぐねた大友勢は、和睦条件を申し入れ両者が協議の末、氏貞は今後大友に与力すること、西郷（現、福津市西郷）と若宮郷を大友に割譲することで和睦した。しかし和睦を屈辱としてきた氏貞の家臣の一部は、天正九年十一月、鷹取城（直方市永満寺）に兵糧輸送の立花勢の帰路を襲い両軍の激突となったが結局、宗像勢は大敗した。この戦には、岡垣の吉木に在った宗像氏家臣の瓜生左近貞延も馳せ参じたが、負傷して戦場から退いている。自らの意思でなかったにせよ、大友氏に違約した結果を招いたことに氏貞は苦慮したが、失意のなかで氏貞は天正十四年三月に病死し後嗣もないままに宗像氏はここに絶えた。この後、蔦ヶ岳城も廃城（「天正十五年、太閤九州征伐の帰りに命ありて、此城を割捨らる『宗像郡誌』」）となった。蔦ヶ岳城の門司口については、『筑前国続風土記拾遺』の赤間山（蔦ヶ岳のこと）古城の項に「水谷門司口は石丸村の地にて、北の方は遠賀郡城畑村に属せり」とあり、上畑の字門司口がこれに該当する。（中島　歩美）

【人名紹介】

●大宮司 宗像氏俊

南北朝時代の武将。神職。兄宗像氏正の養子となり、筑前（福岡）宗像神社の大宮司職をつぐ。建武新政府にそむき、足利尊氏を援助した。文和元年（正平七年）功により、宗像荘、山口上村・山口下村の地頭職を与えられた。応安5年（文中元年）死去。

●戸次道雪

豊後鎧ヶ岳城主。十四代目戸次親家の嫡男。大友家の加判衆。立花闇千代の父であり立花宗茂の養父でもある。十四歳で初陣を果たし、敵将を捕縛する武功を立てるなど当時から大器の片鱗を見せていた無敗の名将。毛利元就、小早川隆景、吉川元春ら中国勢との長年に亘る戦での功績が認められ、一五七一年に立花山城主となり立花氏を継いだが、本人は立花姓を名乗らなかった。龍造寺隆信の筑後侵攻の途上に病死した。死の間際、自分の死後、遺骸に甲冑を着せ柳川の方に向けてこの地に埋めよと遺言をしたが、遺体を戦地に置いてはいけないという家臣たちの判断により戦場から離されることになった。なお、このとき敵軍は攻撃をせずに静かに見送っていたという。家臣を大切に思い、また家臣から尊敬される人望の篤い人であったという。

［引用参考文献］

石井　邦一『岡垣のむら里を訪ねて』（岡垣町勤労者協議会記念誌刊行総会），二〇一六

Ⅴ 豊臣秀吉の九州出兵

島津氏の進出

天正六年（一五七八）、大友氏は南九州の島津氏を攻め、耳川の合戦で逆に大敗を喫する。この結果、大友氏の勢力下にあった諸地方に動揺が起こりはじめる。肥前龍造寺の筑前・筑後進出に対し、田尻氏のように島津氏に援助を請うものもあらわれた。天正十二年（一五八四）龍造寺隆信は島津氏の援軍をうけた有馬氏と島原で戦い敗死した。天正十四年（一五八六）七月、島津氏は筑前表への進出を開始した。大友氏の家臣高橋紹運の籠る大宰府の岩屋城への攻撃は熾烈をきわめ、数日の攻防戦ののち紹運は自刃し岩屋城は落城した。島津勢は宝満城を落とし、さらに立花城へと攻めかかった。この間、島津氏を手引きしその先陣をつとめたのは秋月種実であったが、種実は天正十三年には麻生・宗像の懐柔のため種々奔走をしたこともあった（『上井覚兼日記』）。立花城攻撃が長びくうち、大友宗麟の要請（吉川家文書）を幸いとした豊臣秀吉の将黒田孝高らは同年八月毛利輝元らを先陣として豊前小倉へ歩を進めた。島津氏は種実の献策を受け入れ、立花城攻めを秋月・草原・星野・原田・宗像氏らに任せて兵を徹することにしたのである（『上井覚兼日記』）。

秀吉来る

全国統一の一環として九州出陣をもくろむ秀吉は、毛利氏に対して天正十四年四月にはその準備にとりかかるよう令したが、その一項目には門司・麻生・宗像・山鹿の城々へ人数兵糧を差し置くよう求めている（毛利文書）。十月には、それまで立花城攻めに加わっていた宗像一族は、麻生氏とともに九州上陸をした秀吉配下の小早川隆景・黒田孝高・安国寺らに従い秋月城攻めに参加している（『新選宗像記考証』）。剣岳・浅川・古賀などの城を明け渡し、場合によっては帆柱城も手離すという秀吉への恭順の意をも示した。

筑前から撤退したのち豊後攻めにまわった島津氏討伐のため、秀吉は自ら天正十五年三月大坂を発し、同四月には豊前に着した。秋月種実の支城馬々岳城・岩石城を落とし、同月四月には降人となった秋月氏の居城古処山城へ入った（『九州御動座記』）。五月三日薩州川内の大平寺まで軍を進め、ここに島津義久の降伏を容れた秀吉は進撃の軍をとどめたのである。六月七日筑前筥崎に帰座した秀吉は諸将への国分けを行ない、筑前・筑後を小早川隆景に与えた。岡垣町域も隆景の支配下に統一政権の時代を迎えることとなった。

【人名紹介】

●**龍造寺隆信**（一五二九年～一五八四年）
龍造寺家十九代当主で周家の子。龍造寺家の中でも本家村中龍造寺家ではなく分家水ケ江龍造寺家の出身。島津家・大友家に並んで九州三強の一角を成し、「肥前の熊」と呼ばれた。隆信を危険視した大友家に二度侵攻されるがこれを撃退している。大友家が耳川の戦いで島津家に大敗すると、それに乗じて勢力を拡大し、北上してきた島津家も一時圧倒する。最終的に九州五カ国二島を領して龍造寺家の最盛期を築き上げた。しかし、島津軍との沖田畷の戦いで、数で圧倒しながら戦術に翻弄され敗死した。

●**高橋紹運**（一五四八年～一五八六年）
大友義鑑の重臣・吉弘鑑理の次男として生まれる。大友氏の家臣・高橋鑑種が謀反を起こし、豊前国などの国人がこれに連携して反乱を起こしたとき、父や兄と共に出陣して武功を挙げた。所領として岩屋城と宝満城の二城を与えられた。以降は北九州の軍権を任されていた立花道雪の補佐役を務めながら筑前国支配に貢献し大友氏の主たる戦で奮戦して、名実ともに大友氏の勇将として地位を築いていった。天正六年、耳川の戦いにて大友氏と島津氏が激突し、戦死者を多く出して敗戦してしまった。この戦いを期に大友氏が大きく衰退しはじめた。島津氏が大友氏を滅ぼすべく五万軍の兵で進軍してきた。これを紹運は籠もる岩屋城にて抗戦した（岩屋城の戦い）。この時、味方はわずかに七六三名ほどであったとされ、当初の島津氏側は早期決着されるだろうと思われていたが、紹運は降伏勧告をはねのけて徹底抗戦した。これにより当初の目論見とは反して、半月に及ぶ長期戦となり、島津氏側は三〇〇〇人の戦死者を出すなどした。しかし、圧倒的数には勝てず、味方全員玉砕し、紹運も切腹し果てるという壮絶なる最期となった。

●**秋月種実**（一五四八年～一五九六年）
天文十七年、筑前国の国人である秋月氏一五代当主・秋月文種の次男として誕生したといわれる。弘治三年、父・文種や長兄・晴種が大友宗麟の猛攻を受けて自害したが、種実は家臣に連れられて古処山城落城寸前に脱出し、毛利氏を頼って周防国山口に落ち延びた。永禄二年（一五五九年）一月、秋月氏の旧臣・深江美濃守は毛利氏の支援を得て、種実を居城に迎えると、古処山城を占拠していた大友軍を破り、秋月氏の旧領をほぼ回復した。永禄十一年（一五六八年）には立花鑑載が大友氏に反旗を翻すなど、一時は反大友勢力が優勢だったが、七月二十三日に立花山城が大友軍によって陥落され、永禄十二年（一五六九年）五月二十八日に毛利軍も多々良浜の戦いで大友軍に敗れたため、八月に種実は大友宗麟に降伏した。

●**黒田孝高**（一五四六年～一六〇四年）
戦国時代から江戸時代前期にかけての武将・大名。戦国の三英傑に重用され筑前国福岡藩祖となる。黒田官兵衛あるいは剃髪後の号をとった黒田如水として広く知られる。軍事的才能に優れ、豊臣秀吉の側近として仕えて調略や他大名との交渉など、幅広い活躍をする。竹中重治とともに秀吉の参謀と評され、後世「両兵衛」「二兵衛」と並び称された。

●**毛利輝元**（一五五三年～一六二五年）
戦国時代後期（安土桃山時代）から江戸時代前期にかけての大名。安芸毛利氏の当主。豊臣政権五大老の一人であり、関ヶ原の戦いでは西軍の総大将となった。

●**島津義久**（一五三三年～一六一一年）
戦国時代から安土桃山時代にかけての武将。薩摩国の守護大名・戦国大名。島津氏第十六代当主。島津氏の家督を継ぎ、薩摩・大隅・日向の三州を制圧する。その後も耳川の戦いにおいて九州最大の戦国大名であった豊後国の大友氏に大勝し、また沖田畷の戦いでは九州西部に強大な勢力を誇った肥前国の龍造寺氏を撃ち破った。しかし、豊臣秀吉の九州征伐を受け降伏し、本領である薩摩・大隅2か国と日向諸県郡を安堵される。豊臣政権・関ヶ原の戦い・徳川政権を生き抜き、隠居後も家中に強い政治力を持ち続けた。

（佐々木　悠祐）

Ⅵ 小早川氏より黒田氏へ

秀吉の九州平定

小早川氏の入国

天正十四年、大友宗麟の請いに応じて島津征伐を決意した豊臣秀吉は翌十五年三月末、大軍を率いて小倉に上陸した。これにより九州の大名・土豪等の諸勢力は秀吉に帰服するか、島津氏に味方するかの二者択一を迫られた。花尾城の麻生家氏を初め、北九州の諸将たちは秀吉の傘下に入り、島津攻めに参加した。前年三月、当主宗像氏貞を失った宗像勢も占部・許斐勢等が秀吉の第一線部隊として参戦する。同年五月に島津氏が降伏、秀吉は帰途博多に滞在し、箱崎で論功行賞を行ない、大名の配置を行なった。筑前国には小早川隆景が、豊前国中津には黒田如水、同小倉には毛利勝信がそれぞれ配置された。これにより、筑前一国は群雄土豪割拠に終わりを告げ、統一の姿を迎えた。麻生家氏は筑後二百町を宛がわれて小早川隆景の与力となり鎌倉時代以来その拠点とした北九州の地を去る。岡垣町域に関係の深い宗像氏は天正十四年三月、宗像氏貞の死去により断絶。武領は失い、若干の社領を残すのみとなった。小早川隆景は天正十五年（一五八七）より文禄二年（一五九三）まで在任、跡を養子の秀秋が継承する。秀秋は秀吉夫人高台院の兄木下家定の子。慶長の役に総大将として渡鮮したが、その軽率な行動が秀吉の不興を買い、慶長三年越前府中に移封、筑前国は豊臣氏の直管となり、石田三成が代官として赴任した。三成が帰京して留守の間は神保源右衛門と高尾又兵衛が事務扱い（御誘）をしている。同年八月、豊臣秀吉が死亡し、翌四年に再び筑前国は金吾中納言小早川秀秋の所領となり、翌年の関ヶ原の合戦を迎える。

【人名紹介】

●**豊臣秀吉**（一五三七～一五九八）
初め木下氏で、後に羽柴氏に改める。皇胤説があり、諸系図に源氏や平氏を称したように書かれているが、近衛家の猶子となって藤原氏に改姓した後、正親町天皇から豊臣氏を賜姓されて本姓とした。尾張国愛知郡中村郷の下層民の家に生まれたとされる。当初、今川家に仕えるも出奔した後に織田信長に仕官し、次第に頭角を現した。信長が本能寺の変で明智光秀に討たれると「中国大返し」により京へと戻り山崎の戦いで光秀を破った後、清洲会議で信長の孫・三法師を擁して織田家内部の勢力争いに勝ち、信長の後継の地位を得た。大坂城を築き、関白・太政大臣に就任し、朝廷から豊臣の姓を賜り、日本全国の大名を臣従させて天下統一を果たした。天下統一後は太閤検地や刀狩令、惣無事令、石高制などの全国に及ぶ多くの政策で国内の統合を進めた。理由は諸説あるが明の征服を決意して朝鮮に出兵した文禄・慶長の役の最中に、嗣子の秀頼を徳川家康ら五大老に託して病没した。秀吉の死後に台頭した徳川家康が関ヶ原の戦いで勝利して天下を掌握し、豊臣家は凋落。慶長十九年（一六一四年）から同二十年（一六一五年）の大坂の陣で豊臣家は江戸幕府に滅ぼされた。墨俣の一夜城、金ヶ崎の退き口、高松城の水攻め、石垣山一夜城などが機知に富んだ功名立志伝として知られる。

●**宗像氏貞**（一五四五～一五八六）
一五五七年、鍋寿丸は元服し宗像氏貞と名乗る。翌年には杉連緒とも戦う。この頃大内氏滅亡により宗像郡内にあった大内氏所領・西郷庄の代官河津隆家が氏貞に帰属を決め、河津隆家を中心とした西郷党を支配下に置く。そして大内氏の北九州所領を引き継いだ大友氏に従うこととなる。しかし、毛利氏が北九州に侵攻すると、秋月氏らとともに大友氏を離反。一五五九年九月二十五日、宗像の地を大友氏の支援を得た宗像鎮氏が襲撃、氏貞は宗像を捨て逃亡するが、毛利氏の支援を得て、一五六〇年三月二十七日に所領を奪回し、翌年の三月十五日まで、許斐山城、赤間表、長者原、白山城、蔦ヶ嶽城、吉原里城に数度大友軍立花鑑載・怒留湯融泉・吉弘鑑理・高橋鑑種・臼杵鑑速・立花道雪らの攻勢を防いだ。その後毛利氏と大友氏の講和が成ると、氏貞も大友氏と講和する。一五六七年、高橋鑑種が大友宗麟に叛旗を翻すと、氏貞も同調し、秋月種実、筑紫惟門、大友一族の立花鑑載も同調する。これにより筑前・豊前は大混乱となり、大友氏と毛利氏は立花山城攻防戦等、北九州各地で干戈を交えた。一五六九年、北九州より毛利氏が撤退すると、大友氏に降伏。講和条件として家臣の河津隆家の殺害があり、氏貞はやむなく隆家を殺害した。殺害したものの、これを深く悔やんだ氏貞は隆家の子供達を取り立てて、一門同様の扱いとした。戸次鑑連（立花道雪）が立花氏の家督を継ぎ、立花山城主となるとその関係に氏貞は心を砕いた。自身の妹を人質として側室に差し出したのも、苦心の表れであろう。一五八一年、秋月種実が大友領への侵攻を開始。一部の宗像家臣が立花勢の兵糧を強奪し、道雪は激怒。氏貞は謝罪に努めるも道雪は軍を出し、宗像氏への攻撃を開始した。一度は立花勢を撃退するも、最終的には守りきれず宗像を捨てて逃亡。一五八四年には、側室兼人質として立花道雪の元にいた氏貞の妹・色姫が、氏貞と道雪の対立に心を痛めて自害している。一五八五年に立花道雪が病死すると、すぐさま反撃を開始し旧領を回復した。翌年、豊臣秀吉の九州征伐前に急死した。氏貞の子の塩寿丸が亡くなり氏貞の未亡人も去った為、家督は事実上擬大宮司職（大宮司職に次ぐ職）の一族の深田氏栄が後を継ぐことになった。なお、翌年の秀吉の九州征伐によって、宗像大社の大宮司の権限は、祭礼のみに限定されることとなった。

（谷井　友哉）

Ⅶ 小早川の検地

天正一六年（一五八八）に「筑前国惣御検地アリ」、文禄四年（一五九五）「御国中御検地アリ、八月ヨリ九月迄御検地」と記されているが、御牧郡（後の遠賀郡）については、「小早川家文書」の「筑前国鞍手郡宗像郡御牧郡内目録帳」に山鹿・安屋・脇田・本城の四村が出るくらいで具体的には判明しない。しかし同目録には「今度以撿地之上……文禄四年十二月朔日」と記されており、御牧郡でも、部分的かもしれないが、検地が行なわれたことを示している。『農政座右二』の「慶長元年、筑前ヲ始、九州悉検知ヲ仰付」がこれを指しているかもしれないが、明示し得ない。小早川氏より黒田氏に引き継がれた「筑前国田畠之高村々指出前之帳」は田畠数が町段畝歩で示されており、前記の「目録帳」の高とも一致している。文禄四年ないし慶長元年（一五九六）の検地の結果を示している可能性が強い。同書には、町域では波津浦・内浦村・手野村・吉木村・山田村があげられており、手野村に枝郷原村、吉木村に同高蔵・三吉・野間、山田村に同ぬか塚・黒山・海老津が挙げられている。これらの枝郷は福岡藩初期の高を記した「慶長中調筑前国各村別石高帳」ではすべて本村となっているので、一六世紀末には、それぞれ、手野・吉木・山田の各村の枝郷を形成していたことになる。上畑はまだ現れておらず、戸切は別府村の枝郷として挙げられている。この国中惣都合田畠二万九六九二町六段八畝二三歩、惣井米大豆三十万八四六一石六斗４升八合二勺（寺社領四二〇〇石含む）が小早川秀秋より黒田長政に引き継がれた高である。この文禄の検地高と推測される数字より町域の状態を見ると、田数では吉木村の約一七〇町歩が最も多く、次は山田村の約八三町歩、手野村の六九町歩余りである。波津浦は六町歩足らずで最も少ない。吉木村の田数は筑前一五郡でも粕屋郡中原村の約二〇〇町歩、那珂郡堅粕村の一七八町歩余、志摩郡波多江村の一七二町歩余に続いて第四位に位置する。合田畠数でも、前記中原村、鞍手郡植木村、鞍手郡桜井村、前記堅粕村、志摩郡北崎村に次いで第六位に当たる。後の吉木・高倉・三吉・野間・松原の各村を合した領域である。畠でも吉木村が最も大きく、山田村・手野村がそれに続いている。畠の占める比率は別府が最も小さく、波津が最も大きい。遠賀平野を控えた別府を除くと耕地の二三パーセントが畠である。御牧郡の平均より大きく、筑前一国の平均よりは小さい。農地の生産性は、数字通りとすると、田では内浦村が最も高く、山田村が最も低い。反当八斗三升六合である。最も高い内浦村でも一石六斗足らずである。御牧郡の平均が一石一斗六升であり、全体的には平均的な位置にある。畠の場合は、異常に高い別府を除くと、反当五斗七升七合で御牧郡の平均よりは大きい。

【人名紹介】

●**黒田長政**（一五六八～一六二三）

安土桃山・江戸前期の大名。筑前国福岡藩の初代藩主。播磨姫路生。黒田孝高の長男。通称は松寿・吉兵衛。幼い頃、織田信長の人質となった。関ケ原の戦いでは東軍に属し、その功が認められ筑前国を与えられる。初め名島藩主となったが、後に福崎に城を築き、福岡と名付けた。

（中田　博継）

Ⅷ 小早川時代の岡垣
遠賀衆と岡垣

豊臣秀吉の九州動座の前々年、天正十三年の宗像大宮司氏貞の家臣の分限帳の写が点在する。当町の吉田ツヤ家文書や古門の伊藤家文書にもあり、『太宰管内志』や『宗像郡誌』にも同種のものを見ることができる。その中に「遠賀衆」と記される一団があり八十九名が挙げられている。その当否は別としてその五〇パーセントの姓は現行電話帳に存在する。寛政元年（一七八八）の自序のある『吉木旧記』に姓名の出る吉木村とその関連の住民の内に七名の同姓がある。『分限帳』も『吉木旧記』も資料吟味が必要であり、そのままを直ちに是認することはできないが、村の成立の一手がかりを与えてはいる。『吉木旧記』には「宗像落人」「立花落人」「麻生崩れ」などの文言もあり、杉氏は深田氏、篠田氏は安部氏とも記されており、他姓を名乗ることも考えられ、村の成立過程の一端を示しているともいえる。小早川氏時代、石田三成時代とともに、郡方支配のために郡代、又は、代官が置かれているが、遠賀郡のそれは判明しない。『吉木旧記』には吉木在住の代官として横田太郎右衛門、在住として鬼塚（二万石）・上股助右衛門（一万石）の両名が記されており、慶長五年（一六〇〇）に金吾中納言秀秋が「関ケ原立ノ時、雌衆芦屋ヨリ出船、其時御代官太郎右衛門殿モ前浜マテ打立申サル、二付キ、江中ノ庄屋・百姓鎗・長刀ヲ持、浜ニテ御代官ヲ引包ミ、是非ナク村ヱ引戻シ、田畠ノ御免ヲ思ヨウニ引下ケ、証拠ヲ取リ、納置処ノ米取リ戻ス」とある。伝承ではあるが、農民の感情を現している。

【人名紹介】

●小早川秀秋（金吾中納言秀秋）

安土桃山時代の武将。幼名辰之助。通称金吾。左衛門佐、権中納言。豊臣秀吉の正室高台院の兄木下家定の五男として生まれる。秀吉の猶子となり、丹波亀山十万石を領し、羽柴秀俊と名のる。一五九四年（文禄三）小早川隆景の養子に入る。同年十一月中国に下向して三原城（広島県三原市）に入り、毛利輝元の従妹を妻とした。翌年家督を嗣ぎ、隆景から筑前一国、筑後の大部分、肥前二郡三十三万六千石を譲り受け、隆景は三原に隠居、かわって秀秋は筑前名嶋城に移った。一五九七年（慶長二）朝鮮に出陣。釜山浦城の守将となり、また蔚山城の救助に活躍し、帰国。その後秀吉の怒りに触れ越前北庄に移封されようとしたが、徳川家康のとりなしで筑前にとどまる。一五九九年秀吉の遺命で復領し、筑前・筑後五十二万二五〇〇石を得る。翌年関ヶ原の戦いで西軍として伊勢口を守り、伏見城を攻めたが、九月の関ヶ原決戦時には東軍に応じた。戦功により家康から備前、美作において五十万石を与えられ、岡山城に移り住んだが、慶長七年二十一歳の若さで死去した。秀秋には嗣子がなく、備前・美作は収公され小早川本宗家は断絶した。

（早川　祥平）

学生記者／フィールドワークの感想

中島　歩実

私は、今回の岡垣歴史新聞を通して岡垣町のことを初めて知ることができました。特に今回のフィールドワークで印象に残った場所は岡城址です。これまでの城のイメージとしては立派な建物があるというものでしたが、今回見たのは岩でした。これがお城なのかと始めは驚きました。しかし、岡城址の頂上に到達すると岡垣町が一望でき西側には門田池があり目を閉じて想像すると、ここが城だったことがイメージできました。実際に足を運んで岡垣の歴史に触れることができて良かったです。

中田　博継

岡垣の歴史に初めて触れましたが、「城」という字の由来や、岡垣という地域でどのような歴史が生まれたのかなどを知ることができました。今回の活動で岡垣の歴史について調査したことで、岡垣についての事をもっと詳しく知りたいと思いました。

大賀　康平

私は、岡城に初めて訪れましたが、イメージしていたお城とは大変異なっており驚きました。イメージしていたのは、高い石垣や、瓦葺きの建物などを備えている、天守が建つ近世城郭というものでしたが、実際は山城といって、自然の山を削り、堀り、盛り固めた中世城郭でした。実際にその城の頂上まで登ってみると、辺りを一望でき、戦国時代には、敵を把握しやすいという利点があることが理解できました。自分の目で確かめることで、岡城のことをよく知ることができて良かったです。

早川　祥平

今回、岡垣町の歴史を調査して、実際に戦国時代の跡地に行ってみて、岡垣の事だけでなく、多くのことを学ぶことができました。城へ向かうと聞いたときに、大阪城や小倉城といった建物なんだろうなと思っていたら、城というよりは山でした。城の漢字の成り立ち通り、昔は土に成るんだよと教えていただき、身をもって学ぶことができました。岡垣町の歴史に触れることで調査したときよりもイメージができ、とても勉強になりました。

今井　智紀

岡城跡を始め様々な城跡、歴史あるところへ案内してもらった。岡垣は元々海に面しており、岡城があった周りは山に囲まれ、防衛するのに適したところであったという。三段階で見渡せる場所があり、今は木々で覆われていたが、遠くで敵が攻めてきても見えるようになっていた事に驚いた。岡城跡の二の丸にはたくさんの像が置いてあり後から祀られたのかなと思った。周囲から敵がきたときでもわかりやすいように山の上に城を構えていたのだと思った。岡城址だけでなくそれが岡垣の町でいくつもあったことに驚いた。

佐々木　悠祐

岡垣歴史新聞作成のため実際に岡垣町を探索した。二〇二〇年ＮＨＫ大河ドラマの主人公が明智光秀であり、岡垣町も関わっていることから岡垣歴史新聞を作成しているが、九州共立大学の隣町に戦国時代が深く関わっていることは大変驚いた。岡垣の戦国時代に岡城があるが、我々が思っている石垣があって何階もの建物があるのではなく、山で陣地を作っているのが岡城というものらしい。「城」という漢字は土で成と示されているようにそもそもは山や土塁で、できたものが「城」という意味がある。歴史上の人物が多く登場しているが初耳だ。岡垣歴史新聞を作成するにあたってもっと深く学んでいく必要があると感じた。お忙しい中案内してくださった岡垣町の職員方には感謝申し上げます。

「岡垣歴史新聞」プロジェクト　参加者

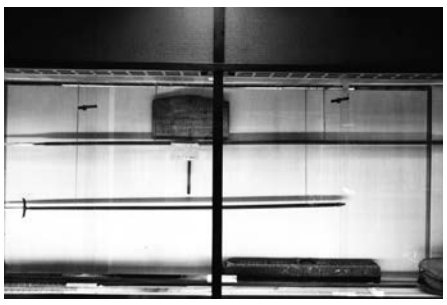
今井　智紀（スポーツ学部３年）
大賀　康平（スポーツ学部３年）
川勝　陽祐（スポーツ学部３年）
川上　滝盛（スポーツ学部３年）
佐々木　悠祐（スポーツ学部３年）
谷井　友哉（スポーツ学部３年）
中田　博継（スポーツ学部３年）
中島　歩美（スポーツ学部３年）
早川　祥平（スポーツ学部３年）

協力　三浦　明彦（遠賀町在中、郷土史家）

指導者　山田　明（九州共立大学）

九州と明智光秀

岡垣歴史新聞第４号は、岡垣の戦国時代についての特集が組まれた。その理由として、２０２０年のＮＨＫ大河ドラマの主人公が戦国時代に活躍した明智光秀（以下、光秀とする）であることも関係している。光秀が活躍し、やがて織田信長（以下、信長とする）を倒し、彼自身も羽柴〈豊臣〉秀吉（以下、秀吉とする）に倒される。そのような戦国時代の出来事があった頃、岡垣では今回の歴史新聞に記したようなことが起こっていたのである。テレビで光秀のドラマをご覧になられたら、是非とも岡垣の戦国時代にも興味を持っていただきたい。さて光秀であるが、活躍した場所は美濃（岐阜県）、近江（滋賀県）、山城と丹波（京都府）であったが、九州とも少なからず所縁がある。紙面の都合もあり、４つの場所を紹介しよう。まず、一つ目は、佐賀県唐津市である。光秀の侍大将の一人である安田作兵衛の墓がある。浄泰寺の境内にあるのだが、なぜ九州の唐津にあるのだろうか。安田作兵衛は光秀と同郷の美濃出身で、光秀の侍大将を務め、本能寺の変の折も斥候、先鋒隊として活躍している。本能寺に攻め込み、信長の右腑に槍を突き、信長側近の森蘭丸を討ち取ったとされる。しかし、光秀が秀吉に倒されると浪人となり、複数の大名に従えたのち九州に下り、筑後柳河（柳川）城主の立花宗茂に仕え、その後肥前唐津城主の寺沢広高に仕えた。ちなみに寺沢広高の妻は、光秀の従姉妹とされる。寺沢広高に仕えた安田作兵衛は、唐津を安住の地としこの地で没した。なお、唐津城天守閣にある資料館には、信長の右腑を負傷させたという安田作兵衛所用の長槍が展示されている。



安田作兵衛所用の槍（写真上段部分の槍）
（唐津城天守閣所蔵）

安田作兵衛の墓
（唐津市、浄泰寺境内）

光秀と九州の関係の二つ目である。熊本県天草市苓北町富岡に光秀の孫、三宅藤兵衛（三宅重利）の墓がある。三宅藤兵衛は光秀の長女と三宅（明智）秀満の間に誕生した。光秀が山崎の合戦で敗死した折、光秀の長女と三宅秀満も近江坂本城で自害した。この時、幼子だった三宅藤兵衛は乳母に守られ、細川家に嫁いでいた叔母の玉子（ガラシャ）の元に逃れた。三宅藤兵衛は、成人後は玉子の夫である細川忠興の家臣となったが、関ヶ原の合戦後は、唐津城主の寺沢広高に仕え、筆頭家老となった。寺沢家は、唐津の他に天草も所領したため、天草支配の拠点とした富岡城を築き、その城主に三宅藤兵衛を任命したのである。三宅藤兵衛は、主君の寺沢広高が没し、後継となった次男の寺沢堅高が当主の時代に、天草で起こった「天草・島原の乱」で富岡城に攻め込まれ戦死した。その墓は富岡城跡地の近くにある。

光秀と九州の関係の三つ目である。福岡県の太宰府天満宮宝物館に光秀の三女の婿であった織田信澄の甲冑が展示されている。織田信澄は、信長の甥で近江大溝城主となっている。織田家一門衆で五番目の席次を持ち、信長にも期待された人物である。しかし、本能寺の変後、光秀と一味同心の疑いをかけられ、織田家の諸将によって殺害されている。光秀と九州の関係の四つ目である。熊本県熊本市の泰勝寺跡に光秀の四女で、細川忠興の妻となった玉子（細川ガラシャ）の霊廟がある。玉子は、関ヶ原の合戦の敗北により大坂屋敷で自害したが、熊本に霊廟が建立された。夫の細川忠興の霊廟も並んで立っている。以上、光秀とは全く関係のない九州の地に、光秀の侍大将の墓があり、娘婿の甲冑があり、四女とその夫、孫の墓がある。また、唐津城主だった寺沢広高の妻が光秀の親族である。次期、ＮＨＫ大河ドラマの主人公である光秀を身近に感じていただき、さらに光秀の生きた時代である戦国時代に思いを馳せつつ、岡垣の戦国時代にも注目していただきたい。

（三浦明彦）

光秀の娘婿・細川忠興の霊廟
（熊本市、泰勝寺跡地）

光秀の四女・玉子（細川ガラシャ）の霊廟
（熊本市、泰勝寺跡地）

参考文献
三浦明彦『蘭丸を討ち取った男・安田作兵衛』私家版
高澤等『戦国武将・敗北の子孫たち』洋泉社

編集後記

戦国時代の岡垣の歴史は如何だったでしょうか。岡垣を領有していた麻生氏は、宗像氏や同氏を支援する大友氏の攻勢によって岡垣の地を去ることになりました。しかし、勝者の宗像氏も軍事的には没落しました。現在では、宗像大社として後世に残っているのみです。岡垣には突出した軍事勢力が生まれなかったことで有力な勢力の草刈り場となりましたが、江戸時代は黒田藩の治世下で平和な時代を迎えています。戦国時代は、まさに戦いの時代です。小さな地域でもその渦中にあったことを後世に語り継ぐことが重要だと考えます。私事ですが、父方の祖先は宗像氏と対立していた河津氏（現在の福津市を領有、鎌倉時代の執権北条氏と姻戚関係で伊藤氏も同族）です。現在の宗像市と福津市にはその名残の城跡や神社などがあり、休日には時々訪ねます。河津氏は戦国大名の大内氏の重臣として豊後（大分）の大友氏と対立していました。私自身、身近な歴史を再認識し、次世代に伝えていこうと思っています。歴史は語り継ぐことで、郷土を大切にするという後続世代の生き方にも影響をあたえるのではないでしょうか。地域活性化新聞『岡垣歴史新聞』は、創刊４年目となり次回は最終号となります。岡垣の住民の方々のニーズに合うような内容で編集したいと思います。ご期待下さい。

（山田　明）